

そもそも虚実の本元を究めようとするならば、鳥雲に勝るものはない。鳥雲というのは、群集を鳥のように、又雲のように動かすことである。人が来て追い払うとき、鳥はすかさず散じ、退くと再び集まる。雲は無心にして風の無い所に会し、風が来れば自ら散じる。そうであれば、兵が千里を往きながら疲労しないのは、人がいない地に行くからである。進んでも、なお敵が防ぐことが出来ないのは、その虚に向かうからである。それ故に戦地というものは知らせてはならず、戦の日を占わせてはならないと云われるのである。我が常に形を現さなければ、敵は我に備える場所が多くなり、敵の備える場所が多ければ必然的に各場所で防御する兵が少なくなる。それ故に、「其の実を避けて、虚を撃つ（『孫子』虚実第六の語）」というのは、我のいわゆる鳥雲である。

およそ「寡を以て衆を撃ち、弱を以て強に向かう（『孫子』の語）」ということでは、鳥雲に勝るものはない。正成の死後であっても、朝家（皇室）に事あらば、敵方は間違ひなく大軍勢となるであろう。然らば何時も要害の地に楯（たて）籠（こ）もって敵軍の鋭気を避け、その惰（おこた）りを見たならば、その時々手立てを替えて、心に鳥雲を忘れるな。出入・集散といった行動を滞らせることなく、専ら敵が虚となる所に乗じて撃つのが、利を速やかに得る方法である。

そうであれば、鳥雲は様々であると云えども、本心の迅疾なることを云うのである。あるいは鳥雲の兵があり、鳥雲の陣があり、備がある。あるいは鳥雲の心があり、質がある。あるいは鳥翔、雲衝の法があり、変がある。あるいは鳥雲の山兵があり、谷兵があり、鳥雲の奇兵がある。鳥雲の心とは、奇と不意とに類似していながらも、同じものではない。深く心を尽くさねばならない。